

ブレンディッド・ラーニングの現場から

ジョン・サーマン
平田 祐基

1. はじめに：ブレンディッド・ラーニングとの出会い

言語センターのブレンディッド・ラーニング・プロジェクト（以下BLP）は、筆者の一人サーマンを中心として行われている。そして、もう一人の筆者である平田は、BLPが始動しようとした際(2014年9月16日) —それはイギリス留学から戻ってわずか五日後のことであったが—ここにプロジェクトの一員として働き始めた。そして、小樽商科大学2号館4階の小さなオフィスが平田の職場である。既にオフィスには数名のスタッフがおり —いづれ様々な仕事に着手することになるのだが—それぞれウェブデザインや元高校英語教員の経験を買われてここに集まっていた。皆英語に堪能な専門家集団といってもよいなか、平田といえば、ここ小樽商科大学商学部を卒業後イギリスの大学院へ留学し言語学を学び、前月にインターネット上のコミュニケーション (i.e. Computer-Mediated Communication) に関する修士論文を書き上げたばかりだったので、BLPにも大変興味があったが、着任直後は具体的にどういった貢献ができるか不安を抱えながらのプロジェクト参加だったのが正直な所だ。

2. ブレンディッド・ラーニングとは

では、われわれが取り組んできたブレンディッド・ラーニングとは何であろうか？ BLとはその名が示唆するように、対面学習（従来型の教室内での講義やゼミ活動など）とオンライン学習（Eラーニングなど）をブレンドした教育・学習アプローチである。「ブレンド」と一口に言っても、これら二つの学習形式の組み合わせ方には様々な方法がある。最も典型的なBL形態である「反転授業 (flipped class)」では、学生が通学する回数を減らして、その分の授業をオンライン上で行う。オンライン授業の部分では予め録画・編集された動画や臨場感あふれるライブ配信による講義が行われ、その前後には学生や教員がそれぞれの場所で質問やディスカッションを交える。それゆえに学生は自分が最も集中できる環境で知識のインプットを行うことができ、教員は全ての学生の授業への貢献・参与を質量ともに確認することができる。対面授業の部分では、学生主体の活動（プレゼンテーション、ワークショップ、フィールドワークなど）に充てることができる。

動画講義へアクセスするためのURLや、あらかじめ取り組むべき読書課題、さらには小テストやディスカッション・質問のためのコミュニケーションの場など、オンライン授業が授業であるためのあらゆる情報・資源は全て「学習管理システム (LMS)」と呼ばれる仮想的枠組み上で管理することができる。それゆえに、学生は与えられた課題を紛失することもなく、書類を持ち歩

く煩わしさからもある程度解放される。このように反転授業では、学生と教員の教育環境を最適化する事で授業の効率をあげ、効果的な学習を促進できるというメリットがある。しかし、先に述べた通りBLの実践方法はこれだけでない。

もう一つの効果的なオンライン・オフラインの組み合わせ方法は、予習・復習にオンライン学習の時間を充てる事である。大学に与えられる単位には、授業出席に費やす時間に加えて、学生が各自で行う予習復習の時間が含まれる。つまりこれが意味するのは、効果的な学習には効果的な予習・復習が必要不可欠ということである。しかし一度キャンパスから離れてしまうと、クラスメートや教員にコンタクトを取るのが難儀になり、積極的なアイデアの交換が生まれにくくなってしまふ。また教員にとっても従来のやり方では、学生の予習・復習に積極的に関与するのは難しい。学生に課題を与え、回収し、目を通したうえで採点を行い、そして結果を通知するのに費やされる時間や労力は計り知れないだろう。教員の労力と時間を確保すると同時に学生の予習・復習の効果を上げるためにも、BLによるアプローチは効果的といえるだろう。

3. 小樽商大のブレンディッド・ラーニング・プロジェクト

以上に挙げたブレンディッド・ラーニングの理論的效果をより現実的なものにするために、ここ小樽商科大学にデジタルタスク室が設置された。ここにあるのは、教材作成やLMS管理のための専任スタッフと機材である。教員の要請があれば、学習活動の一環として学生が使用する事も可能である。実際に多くの学生が訪問し、ここで作成した課題を授業で発表している。特に学生が外国語で動画を作るときは、何度も撮影をやり直したり、編集の段階で何度も映像を再生することになる。デジタルタスク室では、このように集中しながら何度も挑戦する過程で、学生が効果的に外国語を学習していくのを実感することができる。成長とパフォーマンスを褒められた時に学生が見せる喜びや、達成感に満ちた笑顔が、BLの効果と魅力を何よりも物語っている。このオフィスは学生が学びを行い実感する「現場」でもあるのだ。

また、デジタルタスク室ではBLPスタッフと教員の間での相互作用も起こる。BLスタッフの任務である教材開発において、長年専門的立場から研究・教育活動に従事してきた教員のアイデアは欠かせない。しかし、BLスタッフが持つ技術でいったい何ができるのかが不透明なままでは、教員が自分のアイデアをわざわざ持ち込むインセンティブが小さくなってしまふという課題もある。

小樽商科大学では教材開発の拠点が学内にあるので、どんなに小さな興味や疑問からでも簡単にもち寄って、話し合いを始めることができる強みがある。そうした緊密なコミュニケーションを通じて、BLスタッフはクリエイターの立場からBLの仕組みやサンプルを教員に紹介し、教員はそれに基づいてオリジナリティあふれる具体的教材作成案を持ち込む。そうして出来上がった教材はすぐに自分の授業で使用することができ、一方でニーズ情報を得られたBLスタッフは、さらに技術を磨いて次の教材作成に備えられるのである。

以上に挙げたような強みが小樽商科大学にはあり、デジタルタスク室は小さいながらもその中

心的役割を担っている。専任スタッフの数が少ないため立ち寄った際には少々多忙な印象を受けるかもしれないが、それは何か面白いものを作ろうと悪戦苦闘している証拠である。スタッフは皆気さくで、新たな発見をもたらしたり教材を使用したりしてくれる教員と学生を待ち望んでいるので、是非とも気軽に立ち寄っていただきたい。

4. おわりに

平田が小樽商科大学に着任してからの一年は、BLPに必要な環境の整備と教材の開発が主な活動の焦点であった。これらの活動は主に、学内での運用に主眼を置いて行ってきたものだが、同時に地域や世界とのつながりも意識してきた。ここで作成される教材はデジタルであるからこそ、地域や世界とつながるための物理的障壁を乗り越えることも比較的容易であろう。そうしてグローバルなレベルでの協力体制が整えば、より効果的な教育や社会貢献、そしてその為の研究の幅も広げられるかもしれない。それ故に、このプロジェクトの可能性は、今後様々な方向へと拡大・展開していこう。今後の動向についてはBLPのウェブページがあるので、大学公式ホームページから参照いただきたい。

小さなオフィスではあるが、そんな社会とのダイナミックな繋がりを実現するためBLPのメンバーは皆、奮励している。その中で、どれも少しずつではあるが、学生、職員、そして研究者の視点に立つ事を心がけながら、このプロジェクトは成長してきた。相反する様々な意見に囲まれる度に葛藤や迷いもあるが、それらを効果的に取り入れて相乗効果をもたらす事ができるように、これからも尽力していきたいと考えている。平田が着任当初に持っていた小さな不安はどれだけ正当化しえたかはわからないが、BLPにとって非常に意味のある一年であった。そしてサーマンにとっても、この一年は挑戦と発見の毎日であった。彼の熱意と発想力を軸にして、これからもBLPが小樽商科大学と地域の繁栄に大きく貢献していくことを期待している。